

# 死後魂は御山へ行く ―木曾御嶽と霊神信仰―

A soul goes to the mountain after death: Mt. Kiso Ontake and faith in *reijin*

小林奈央子

KOBAYASHI, Naoko

愛知学院大学文学部

(Faculty of Letters, Aichi Gakuin University)

## Abstract

Mt. Kiso Ontake (3,067m), which straddles Gifu and Nagano prefectures, has been an object of worship since ancient times. In the eighteenth century, two ascetics, KAKUMEI (1719–1786) from Owari province and FUKAN (1731–1801) from Musashi province, began guiding lay pilgrims up the mountain. Thereafter, many Ontake confraternities were formed in the surrounding Chubu and Kanto regions. For these associations, the spirits not only of gods and Buddhas but also of deceased members enshrined as *reijin* (spirits of ascetics and believers who have received divine status) descend into the body of the medium and deliver oracles using a shamanic technique called “*Ozatate*”, which was created by Fukan. Total 30,000 *reijin-hi* or stone monuments enshrining *reijin*, have been built on Mt. Kiso Ontake. Their placement on the mountain is based on a belief established by FUKAN and his disciple ISSHIN that “after death, the souls of Ontake believers go to the mountain (Mt. Kiso Ontake).”

## 要旨

岐阜県と長野県にまたがる木曾御嶽（3,067m）は、古くから信仰の対象となってきた。江戸時代後期になると、尾張国の覚明（1719–1786）、武蔵国の普寛（1731–1801）という2人の行者によって大衆開放され、2人の出身地である中部と関東では、木曾御嶽に信仰登拝する御嶽講が多く組織された。各御嶽講では、普寛が創出した「御座立て」と呼ばれる巫術によって、神仏のみならず、「霊神」として祀られた亡くなった行者や信者の御霊を降臨させ、託宣を聞く。そうした霊神の依り代となるのが霊神碑であり、木曾御嶽山内には約3万基あるとされる。霊神碑を山内に建立するのは、普寛やその弟子の一心などによる「死後御嶽信者の魂は御山（木曾御嶽）へ行く」という信仰にもとづいている。

## 1. はじめに

木曾御嶽（3,067m）は岐阜県と長野県にまたがるコニーデ型活火山の独立峰である。「<sup>かね</sup>金の御嶽」と尊称された大和吉野の金峯山に対し、「<sup>おう</sup>王の御嶽」と呼ばれ、それが次第に「<sup>おんたけ</sup>御嶽」と呼ばれるようになった

とも伝わる。山容は壮麗で、木曾御嶽への信仰が歴史的にさかんである東海地方では、各所から季節を問わずその姿がよく見える。そのため、「今日は御嶽がよく見えた」という話が日常的な会話の中でなされたりもする（第1図）。また、岐阜県や愛知



第1図 名古屋市天白区から見える木曽御嶽

県の小・中・高いずれの学校においも「御嶽」が歌詞に入った校歌がしばしば見られる。たとえば、木曽御嶽を江戸後期に大衆開放した尾張国の行者覚明(1719-1786)の出生地とされる春日井郡牛山村(現在の春日井市牛山町)の牛山小学校の校歌は「北に御岳 見はるかす 覚明行者の 産湯の街に」と始まる。

さらに木曽御嶽および北東へ進んだ木祖村の鉢盛山(2,447m)は、尾張の人びとの暮らしに欠かせない木曽川系の水源地でもある。濃尾平野では稲作を支える豊かな水の源である木曽御嶽に朝な夕なに手を合わせて感謝したという。

以上のように、東海地方において木曽御嶽は、遠方にありながら日常的にその姿を見ることのできる身近な山であり、信仰の対象でもあった。

## 2. 大衆開放した覚明と普寛

現在、木曽御嶽登拝の主要な玄関口となっている黒沢口(現木曽町三岳, 旧木曽郡三岳村)と王滝口(木曽郡王滝村)のそれぞれの麓には、社家の武居家、滝家が代々奉仕する御嶽神社(里宮)がある。室町中期から近世中期までは、この二社家が指導者的立場となり、登拝前に100日あるいは75日の重潔齋を経た「道者」にのみ、御嶽に登ることが許されていた。長期の潔齋期間には火を別にし、で五辛や魚肉を食べない、仏事へ接触しないなどの決まりがあり、「昼夜光明真言を誦し、水垢離をとるなり」という毎日の行も課せられていた<sup>1</sup>。

そして、そのように重潔齋を経た一部の道者にの

み開かれていた木曽御嶽を、江戸後期、軽潔齋にて大衆が登拝できる山へ変貌させたのが、尾張国の行者覚明と、武蔵国の本山派修験<sup>ほんみやういんふかん</sup>本明院普寛(1731-1801)である。

覚明は、天明2(1782)年、御嶽を支配していた神職武居家と木曽福島<sup>きそふくしま</sup>の代官山村氏に軽精進登拝を願い出たが認められず、天明5(1785)年、地元民を引き連れ無許可のまま黒沢村から登拝を強行した。また、翌6年にも集団登拝を敢行し、その年の夏、山上の二の池畔で死去したと伝えられる。従来までの慣例を打ち破る強行登拝ではあったが、それ以降登山者が徐々に増え、地元もその経済効果に次第に関心を寄せるようになっていった。当初軽精進での大衆開放に反対していた神職武居家も、寛政4(1792)年正月に6項目の登山規定を定めた。軽精進での入山、入山料200文を徴収、登山期間は6月14日から18日の5日間、武居家宅に止宿する、登拝の一切は神官の先導で3日の精進を行う、御札や御守りは下山の折に武居氏宅で授与されるというものであった<sup>2</sup>。

一方の普寛は、寛政4(1792)年、新たに王滝村の登山道を信者ともに開削し、続く寛政5年、6年にも同行を引き連れ登拝に挑み、3ヶ年にわたる開山事業を完遂させた。ただし、王滝村からの登拝は、御嶽の祭祀と登拝に伴う利益を独占したかった黒沢側からの強い反発があり、すぐには認められなかった。代官所からの山法違反のお咎めとそれに対する普寛や江戸からの登拝者側の反発が繰り返されたのち、寛政11(1799)年6月に、帰りは黒沢村から下山すること、黒沢村に入山料を支払うなどを条件に、王滝口からの登拝も公認されるようになった。

## 3. 「御座」と高神、そして霊神

王滝口を開山した普寛は、御嶽信仰において最大の特徴である、神降ろしの巫儀「御座」<sup>おざ</sup>を創出した。御座を執り行うことを「(御)座を立てる」と表現することから、「御座立て」と呼ぶこともある。「御座は百色」と言われ、講ごとにさまざまな違いが見られるが、御嶽講で最も広く見られる形態が「中座一<sup>なかざ</sup>前座<sup>まへざ</sup>」の組み合わせでおこなわれる御座である。自

1 宝暦年間写本『御嶽山座王権現登山次第』(生駒勘七, 1966: 52 ページ), 『扇草』下巻(寛政年間)(生駒勘七, 1966: 23 ページ)に記載。

2 王滝村誌編纂委員会[編](2020): 202 ページ。



第2図 木曾御嶽黒沢口登山道8合目での御座

らの身体に神霊を迎え入れる憑坐の役を担う「中座」(講によっては、「座人」<sup>ざじん</sup>、「神代」<sup>かみしろ</sup>)などと呼称することもある)と、中座の身体に神霊を降ろすことを助け、降臨した神霊を統御し、神託を聞く役を担う「前座」(講によっては「前」,「正面」などと呼称することもある)が向かい合っておこなわれる(第2図)。

普寛が御座をどのように創出していったのか、その過程が2000年代以降中山郁の史料発掘によって明らかにされている。御嶽普寛神社所蔵(秩父市大滝)『普寛行者道中日誌』、御嶽神社(旧金剛院, 埼玉県旧両神村, 現小鹿野町)所蔵『武尊山開闢記』と『(無題)』の御座の託宣記録(写本)、さらに、高麗神社(埼玉県日高市)が所蔵する普寛が伝授した手文・切紙などが主なものである<sup>3</sup>。これらの史料を通じて中山は、普寛は憑坐役の中座に災因の原因となる生霊死霊などを憑け、その意思を聞くという、従来の寄加持(憑り祈祷)の形態から、高神である神仏そのものを直接中座の身体に降ろして語らせる方法を求めて工夫を重ねていたとみる<sup>4</sup>。

さらに、普寛は寛政5(1793)年3月27日の夜に不動明王から御座の直伝を受けたとして、これまでの御座の法式を整備したうえ<sup>じょしんしよぶつげんらいひほう</sup>『諸神諸仏現来秘法』と名付け、のちに弟子たちに伝授するようになる<sup>5</sup>。それが、武尊山麓の法称寺(群馬県片品村)や埼玉県文書館(旧大宮寺高麗神社が寄託)などに残り、そのうち最後に成立したものが開闢普寛堂(埼

玉県本庄市)所蔵の『諸神諸仏現来秘法』(卷子本)である<sup>6</sup>。普寛の直筆したもので、天金に水晶軸を用いた豪華な装丁がなされており、跋文から寛政8年(1796)正月に書き記したものであることがわかる。また、跋文の冒頭には「右 秘法予三十余歳苔修」とあり、普寛がこの巫儀を完成させるために長い年月を要したことが記されている。

普寛が直接神仏を中座に降ろし、直接神託を得る方法を編み出し、最初に成功したのは天明8(1788)年8月の祈祷であったとされる。その折に、普寛は天照太神宮や山王権現などほか、薬師如来が中座に降臨したと、『(無題)』の御座の託宣記録(写本)の中に記している<sup>7</sup>。

こうした普寛の尽力により、御嶽講では生霊死霊ではなく、神や仏など人知を超えた存在を行者の身体に直接降ろす御座の伝統が成立した。そしてその伝統は、その後、生前人であった行者や信者で、神位を授かり「霊神」として祀られた者の御霊を降ろすことへも繋がった。つまり神位を得た者は、生前人であっても、単なる死霊(ホトケ)とは異なる存在とみなされたのである。

#### 4. 霊神号と霊神碑

ただし、明治以前においては、「霊神」の使用は一般的ではなかった。木曾谷最古といわれる、天保9(1838)年黒沢の大泉庵(現在は大泉寺)に建てられた覚明供養塔には「大先達阿闍梨覚明法印」と彫られ、覚明に対し仏教あるいは修験に基づく称号が与えられていた。その後、天保14(1843)年、木曾岩郷に「覚明神霊」と銘記された石碑が、覚明講社によって次々建立された。弘化2(1845)年、飛騨高山の日和田に建立された石碑には「大阿闍梨覚明霊神」とあり、木曾の郷土史家であった生駒勘七はこれを「霊神」という称号を用いた石碑の初見とした<sup>8</sup>。また、嘉永3(1850)年に上野東叡山から覚明に菩薩の称号が追贈された際は、追福のため、安政6(1859)年黒沢赤岩渠に「御嶽山勢至覚明大菩

3 中山郁(2007):44ページ。

4 中山郁(2007):53～54ページ。

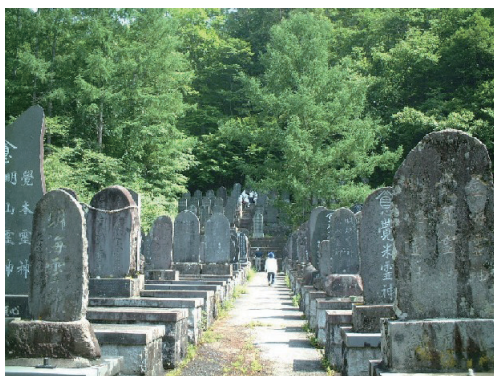
5 中山郁(2007):61ページ。

6 深瀬央道(2009):34ページ。

7 中山郁(2007):54ページ。

8 生駒勘七(1966):208ページ。





第3図 木曽御嶽黒沢口登山道4合目霊神場



第4図 木曽御嶽黒沢口登山道4合目霊神碑前の御座

薩」の碑が黒沢麓講により建立されたという<sup>9</sup>。一方、普寛を祀った最古の石碑は、弘化2（1845）年王滝里宮入口に建てられた行者碑であるとされ、弘化4（1847）年の「傳燈阿闍梨本明院木食普寛でんとうあじやりほんみょういんもくじきふかん」と記された石碑も存在する。

以上のように、19世紀の段階では両開祖の供養や追福のために、「行者」や「菩薩」などの仏教や修験に基づく称号を付した供養塔や石碑が建てられていたようである。それがのちに御嶽講の特徴的な慣習として山内に建立される「霊神碑」の建立に繋がっていく（第3図）。

霊神碑は、生前修行を積んだ行者や、講の活動に尽力した信者などが神位を受け、死後の御霊が祀られた石碑である。江戸時代後期には「霊神」の号を付したいわゆる「霊神碑」は、復古神道の系統をひく講において見られる程度であった<sup>10</sup>。それが、明治元（1868）年の神仏判然令による、菩薩号の廃止、神道化政策などにより「行者」や「菩薩」の称号の彫られた石碑から「霊神」の称号が用いられたものに代わったとされる。そして、明治7、8年ごろからようやく一般行者のための霊神名の追贈や、霊神号を受けた行者や信者の御霊を祀った霊神碑の建立が盛んになってくるという<sup>11</sup>。つまり、当初は、開山

などごく一部の限られた積徳の行者を供養する目的で建てられた石碑が、明治以降、次第に「霊神」の号を受けた行者や信者を祀る石碑へと性格を変えていったことがわかる。

霊神碑ではないが、関東の墓石の実態を精査した新谷尚紀によれば<sup>12</sup>、それまで墓石の造立趣旨が「菩提」であったものが、宝暦年間（1751-64）以降からは「霊位」に変化しているという。新谷によれば、「菩提というのが死者の極楽往生のための石塔造立であるのに対し、霊位というのは死者の鎮魂の依代としての石塔の造立であることを示し、「石塔が死者の菩提のための供養塔であるとする考え方から死者の霊魂の依代であるとする考え方へと大きく変化してきたこと」がうかがえるとしている<sup>13</sup>。もちろん御嶽講の霊神碑は墓石とは異なるが、御嶽講の石碑も、幕末から近代にかけては行者の追福を目的とする供養塔としての性格から、のちに行者を霊神として祀るものへ変化しているのである。

さらに、御嶽講の霊神碑の場合は、「依り代」という点で、別の働きももつ。木曽御嶽山内で行われる「御座」では、呼びたい霊神の祀られた霊神碑前で行われることがある（第4図）。すなわち、霊神の依り代である霊神碑の前で御座を行うことでより速やかに霊神の降臨をみることができるとされているからである。霊神碑は木曽御嶽山内には約3万基あるとされる。霊神碑を山内に建立するのは、普寛による「なきがらは いづくの里に 埋むとも 心御嶽に 有明の月」という辞世の句や、普寛の弟子である一心いつしん

9 「勢至」と付いているのは、覚明が木曽において、「月の化身」（月天子）（本地：勢至菩薩）としてムラの二十三夜講で祀られていたからである。

10 弘化4（1847）年、神道系である関東巴講、中里允修が、神道の慣習に従って「亀翁霊神」の諡号を追贈されたのが「霊神」の号の嚆矢とされる（生駒勘七、1966：209ページ）。

11 生駒勘七（1966）：208～209ページ。

12 新谷尚紀（1991）：125～199ページ。

13 新谷尚紀（1991）：158ページ。



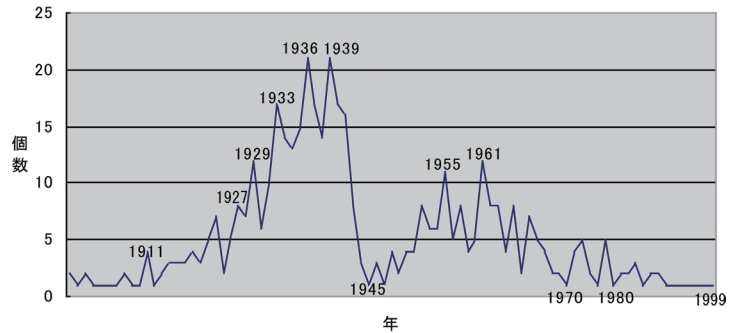
第5図 岩崎御嶽山（愛知県日進市）

（1771-1821）による「御嶽の神を信仰する者の霊魂は、死後、童子としてお山に引きとってもらえる」などの言い伝えなどから、「御嶽信者の魂は死後御山（木曾御嶽）へ行く」と信じられているからである。霊神の依り代であるとされる霊神碑を木曾御嶽山内に配することは、その信仰を目に見える形で表したものである。

## 5. 霊神場の現況

複数の霊神碑を祀った霊場のことを霊神場といい、たいていは講ごとに区画されている。御嶽講の信者は「夏山」「寒山」といって、年に何度か木曾御嶽に来山するが、山に登ることだけが重要視されているわけではなく、故人となった所属講の先達や自らの先祖が祀られた霊神碑に参ることも大きな目的の1つとなっている。しかし、近年では講員の高齢化、講の継承者の減少によって、霊神碑を新たに建立する人はもちろん、霊神場に参る人も激減しており、霊神場の適切な管理や維持が危ぶまれている。

御嶽講の霊神碑は、木曾御嶽のみならず、中部や関東などの講社がある地元や、写し霊場となっている地方のミニチュア御嶽山にも配されている。かつて「3度登れば木曾御嶽に1度登ったご利益がある」と言われた中部地域最大の拠点である岩崎御嶽山（134 m、愛知県日進市岩崎町）にも496ヶ所の霊神場に4599基の霊神碑がある（第5図）。愛知県を中心とした中部地域の御嶽講の霊神場となって



第6図 霊神場建立年と個数の推移（岩崎御嶽山） 小林奈央子作成

いるが、新たな霊神場・霊神碑を建立する信者もほとんど見られず（第6図）、小林奈央子（2008）に報告した悉皆調査時点ですでに、参拝形跡の残る霊神場は全体の約40%にとどまり、参拝されていない、荒廃している霊神場が多く見られた。また、近年は近隣の霊神場でも後を継ぐ者がおらず、霊場をやむなく解体撤去する例が相次いでいる（第7図）。これは一般墓において、単身世帯の増加や少子化などにより、累代の墓の継承が困難なため、墓石を解体撤去し、墓所を更地に戻す「墓じまい」が増加している状況と共通している。霊場によっては、撤去した霊神碑を解体することはせず、まだ祭祀が続いている別の霊場へ移したり、個人宅へ祀り直したりしている。ただ、「死後魂は御山へ行く」と信じられ、山内に建立されることに意味があった霊神碑の慣行は変容、消滅してきている。



第7図 霊神場解体を前に事前に精抜きがされた霊神碑（愛知県みよし市）

## 文献

- 生駒勘七（1966）：『御嶽の歴史』。340 ページ，宗教法人木曾御嶽本教，長野。
- 王滝村誌編纂委員会〔編〕（2020）：『村誌 王滝 歴史編Ⅰ』。227 ページ，長野県木曾郡王滝村。
- 小林奈央子（2008）：霊神碑は語る ―東海地方における霊神碑の現況と霊神信仰。山岳修験，第 42 号，101-122。
- 小林奈央子（2010）：第 4 章 御嶽講と造形テキスト ―霊神碑―。『御嶽講における宗教テキスト諸位相の分析的研究』（博士学位論文），112-146，名古屋大学。
- 新谷尚紀（1991）：『両墓制と他界観』。313 ページ，吉川弘文館，東京。
- 中山 郁（2007）：『修験と神道のあいだ ―木曾御嶽信仰の近世・近代―』。332 ページ，弘文堂，東京。
- 深瀬央道（2009）：『増補・改訂版 普寛堂宝物拝見記』。95 ページ，御嶽教滋賀大教会，大津。